

老老介護の中で見たもの

岐阜大学教育学部附属小中学校 9年

林 咲寧

「自分が死ねばいいんだろうな。」

その言葉を聞いたとき、私は何も言い返すことができなかった。祖父の口からこぼれたその一言は、静かな部屋の中で重く響き、今でも耳に残っています。

私の祖父母は、いわゆる老老介護の状況にあります。祖父が数年前に心臓の病にかかってしまったのです。命は助かりましたが、祖父は要介護認定を受けました。その日から祖母が祖父を支え、二人で生活を続けてきました。しかしその日々は、外から見える以上に厳しいものでした。祖母は「もっと早く病気に気づいていればよかった」と自分を責め、祖父のすべてを背負い込むようにして生活をしていきました。これまで私の前では決して弱音を吐かなかった二人が、あるとき初めて本音をこぼしました。その姿に私はこれまで見えていなかった現実の重さを知りました。

私や両親も、できる限り生活の手伝いをしてきました。しかし、それでも状況が良くなることはなく、祖父母は少しずつ余裕を失っていききました。終わりの見えない介護の中で、支える側もまた静かに疲弊していく。その様子は、目に見える形ではなく、日常の中で少しずつ積み重なっていくものでした。祖父は何より祖母を心配しているようでした。自分が居なくなれば負担が減るのではないかと祖父は常々考え、悩み疲れていました。全員がこれからの事を不安がっていました。その不安が言葉になり、衝突が起きることも多々ありました。その光景は、老老介護が本人たちだけでなく、周囲の人間にも影響を与えていることを強く感じさせました。しかし祖父だけはよく自分の昔のことを話したり、前と変わらない素ぶりをみせていました。私はそれがとても嬉しかったです。祖父自身も辛いだろうに、家族皆が変わっていく中で祖父の優しさだけは変わってないと実感できたからです。しかし、やがて祖父は認知症を発症し私の名前を忘れることが増えました。これまで当たり前でできていたことが少しずつできなくなっていく、目の前にいるのに、以前の祖父とはどこか違う。その変化を受け止めることは、簡単なことではありませんでした。祖父母は人との関わりを何よりも大切にする人でした。そんな人が今までの家族や親戚、一緒に商売をやってきた人を忘れていくのはとても辛いことだと感じました。思い出した時、祖父は「思い出してよかった、忘れたままじゃなくてよかった」と言います。その姿は言葉に表せない複雑な感情を私の中に生みます。

その後、祖父は高齢者施設に入ることになりました。環境が変わり、少しは安心できるのではないかと思います。祖父は「早く帰りたい」「いつ帰れるのか」と繰り返す口にしていました。その言葉を聞いたたびに、私はどうすることもできない自分の無力さを感じ、胸が締めつけられるような気がしました。祖父にとっての「家」とは何か、そして本当に安心できる場所とは何かを考えさせられました。私はこういった経験を通して、老老介護とは単に高齢者同士が支え合うことではなく、その中に多くの苦しさや葛藤が含まれている現実を知りました。しかし私は自分の家族が不幸だとは思いません。今までの思い出は祖父が忘れていても私達家族が覚えていられるからです。人がいつか死ぬ事は確定しています。だからこそ、その限られた時間の中でどれだけ多くの人と出会い、どれだけの思い出を持って死んでいけるかが大切だと思います。そして、その思い出は特別な出来事だけでなく、何気ない日常の中で生まれる小さな出来事の積み重ねによって形作られていくものだと思います。そして、その積み重ねこそが自分の人生を豊かにし、後悔の少ない生き方につながっていくのだと思います。

祖父は今、いつ何が起きてもおかしくない状態にあります。今までの私は祖父の変わりようを正面から受け入れて、新たな思い出を作ろうとする事ができませんでした。だからこそ私は、大切な人も人間だから死ぬということをきちんと理解し、これから、私に大切なものを沢山教えてくれた祖父に感謝の気持ちを持って、向き合う姿勢を持ち続けていきたいです。